

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00893

研究課題名（和文）パラ言語情報を示す発話の第二言語習得—ドイツ語心態詞の音声の発話と知覚

研究課題名（英文）Second language acquisition of speech with paralinguistic information: production and perception of German modal particles

研究代表者

生駒 美喜 (Ikoma, Miki)

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：90350404

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：ドイツ語の日常会話においては、「確信」や「反論」など話し手の発話意図や感情をあらわす語が多く用いられる。本研究は、日本語を母語とする学習者がドイツ語を学ぶ中で発話意図を含む音声をどのように習得していくのか、生成と知覚の両面から分析を行った。その結果、「反論」を示す発話の知覚においてはドイツ語の言語学習が影響しており、学習開始後すぐであっても、非学習者と比べて「反論」の意図をより正確に知覚できていることが明らかになった。学習開始後2年以上を経過した学習者の発話は、特に持続時間と強さに関して学習開始直後と比較しドイツ語母語話者と類似する音声特徴を示していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国語学習者が自然で円滑なコミュニケーションを行うためには、話者の意図や感情、すなわちパラ言語情報を正しく相手に伝えることができ、正しく理解することができる能力を養うことが重要である。しかしながら、外国語学習者がパラ言語情報をどのように習得していくのか、言語特有あるいは言語普遍的な音声特徴が何であるのかは未解明な点が多い。本研究において、外国語学習者がどのようにしてパラ言語情報を含む音声を習得していくのが生成・知覚の両面からより明らかにされたことにより、外国語を用いて円滑な口頭コミュニケーションを行うために必要不可欠な音声の効果的な習得のための手がかりを与えることが出来る。

研究成果の概要（英文）：In everyday German, words such as 'denn' and 'schon' are used to express the speaker's intentions and emotions, i.e. paralinguistic information such as 'conviction' and 'refutation'. In this study, we analysed how Japanese native speakers acquire utterances containing intentions while learning German, both in terms of production and perception. The results showed that learning German had an influence on the perception of utterances indicating 'refutation', and that learners were able to perceive 'refutation' utterances more accurately than non-learners, even immediately after starting to learn German as a foreign language. Learners' utterances more than two years after the start of learning showed some prosodic features similar to those of native German speakers, especially with regard to duration and intensity, compared to those immediately after the start of learning.

研究分野：外国語のパラ言語情報と音声特徴とのかかわり

キーワード：ドイツ語 音声 パラ言語情報 発話意図 外国語学習

1. 研究開始当初の背景

(1) ドイツ語の日常会話においては、ja、doch、denn、schon などの心態詞と呼ばれる様々な語が多く用いられ (Ikoma 2007)、話し手の発話意図や意図的感情など、様々なパラ言語情報 (森他 2014) をあらわす。パラ言語情報を含む音声を習得することは、外国語学習者にとって円滑な口頭コミュニケーションを行うために大変重要である。ドイツ語学習者は自分の発話意図を的確に聞き手に伝えるためにどのようにすれば効果的に音声を習得することが出来るだろうか。また、どのようにすればドイツ語母語話者の発話に含まれる意図や感情を正しく知覚することが出来るのか。ドイツ語のパラ言語情報を含む音声特徴とその知覚はまだ解明されていない点が多いことから、本研究ではドイツ語母語話者の音声によるパラ言語情報伝達の仕組みを解明し、それに基づいて学習者によるパラ言語情報の習得メカニズムを明らかにする。

(2) 先行研究において、感情の知覚には一定の言語普遍性が見られることも明らかになってきている (Scherer 2000; 福岡 2017 等) では、当該外国語を学習していない非学習者は学習者と同様に音声におけるパラ言語情報を知覚することが出来るのであろうか。そこで本研究では、ドイツ語の心態詞を含む音声におけるパラ言語情報の知覚に関し、ドイツ語学習者、ドイツ語母語話者に加え、ドイツ語非学習者も対象に分析を行う。

2. 研究の目的

本研究では、ドイツ語の心態詞を含む音声に含まれるパラ言語情報に注目し、申請者によるドイツ語心態詞および日本語終助詞に関するこれまでの研究成果をふまえ、学習者によるドイツ語のパラ言語情報を表す心態詞を含む発話の音声習得のメカニズムを解明する。具体的には以下の4点の解明を目的とする：

- (1) パラ言語情報を含む音声をドイツ語母語話者はどのように発話し、知覚しているのか、
- (2) ドイツ語学習者によるパラ言語情報を表す音声の発話と知覚にはどのような特徴が見られるか。
- (3) ドイツ語学習者によるパラ言語情報を表す音声の発話にはドイツ語母語話者と比較してどのような共通点 (言語普遍性) 相違点 (言語依存性) があるか。
- (4) パラ言語情報を表す音声の知覚には、ドイツ語母語話者、ドイツ語学習者、ドイツ語非学習者においてどのような共通点 (言語普遍性) 相違点 (言語依存性) が見られるのか。

3. 研究の方法

(1) ドイツ語学習者のパラ言語情報を含む発話の知覚面からの分析

日本語を母語とするドイツ語学習者が学習開始後 2 ヶ月経過した時点 (実験 1 回目: 2019 年 6 月) と、学習開始後 2 年以上が経過した時点 (実験 2 回目: 2021 年 6 月) に、同一の手順、資料を用いて知覚実験を行った。その際、聴取する音声データとして下記 (2) に述べる発話実験にて得られたドイツ語母語話者による発話データを用いた。学習者は PC 上に提示された音声を聴取し、「確信」「留保付肯定」「反論」のいずれの状況にあてはまる発話であるかを回答した。同様の知覚実験を、(2) の発話実験に参加したドイツ語母語話者とは異なるドイツ語母語話者、さらには日本語を母語とするドイツ語非学習者を対象に実施した。

(2) ドイツ語学習者のパラ言語情報を含む発話の生成面からの分析

日本語を母語とするドイツ語学習者が学習開始後 3 ヶ月経過した時点 (実験 1 回目: 2019 年 7 月) と、学習開始後 2 年以上が経過した時点 (実験 2 回目: 2021 年 7 月) の 2 回、全く同じ手順で同じ実験資料を用いた発話実験を実施した。本来は、実験開始後 1 年経過した時点 (2020 年 7 月) でも実験を実施する予定であったが、コロナ禍のため実施することが出来ず、やむを得ず 1 年後となる 2021 年に一部オンラインにて実験を実施した。さらに、2022 年には、実験 1 回目・2 回目に参加した学習者のうちドイツに留学している学生のみを対象とした発話実験をオンラインで実施した。実験資料は、ドイツ語心態詞 schon が含まれる 2 種類の短文である。心態詞 schon は、状況によって「確信」「留保付肯定」「反論」という 3 つの異なる発話意図を示すとされており、2 種類の短文を 3 つの異なる状況に埋め込み、会話の形で発話してもらった。また、同じ資料を用いて同様の手順にてドイツ語母語話者にも実験を実施した。実験で得られた音声データは、以下の点を中心に音響分析を行った：

ピッチアクセントがおかれる位置

発話全体にかかる音声特徴 (文全体およびアクセント部分における基本周波数、インテンシティ、持続時間)

心態詞およびその周辺の単語の母音部分の第一・第二フォルマント (母音の音質)

また、ドイツ語学習者の実験 1 回目と 2 回目の発話の生成面を比較する際、ドイツ語母語話者に

よる知覚実験を実施し、それぞれの発話を聴き、「確信」「留保付肯定」「反論」の発話としてふさわしいかどうか、5段階で評価してもらった。

4. 研究成果

(1) ドイツ語学習者によるパラ言語情報を含む発話の知覚

以下の図1に、学習者の実験1回目(JD2019)、実験2回目(JD2021)、ドイツ語非学習者(JN)、ドイツ語母語話者(DM)による、2種類の短文の状況別(Zuversicht = 「確信」、Einschränkung = 「留保付肯定」、Widerspruch = 「反論」)の知覚実験結果をまとめて示す。

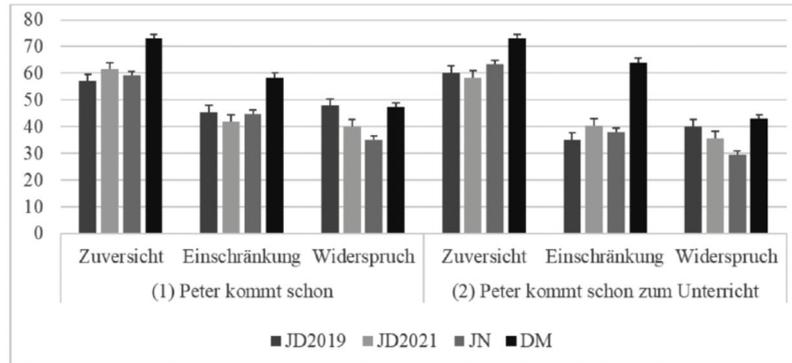


図1：JD2019、JD2021、JN、DMによる2種類の短文の知覚 (Ikoma 2023b:144)

知覚実験にて得られたデータを基に統計分析を行った結果、以下の点が明らかになった：

知覚実験1回目と2回目では、ドイツ語学習者の知覚に有意差は見られなかった。但し、コロナ禍によって2020年以降ドイツ語学習者は対面での学習からオンラインでの学習に切り替わっており、このことが、ドイツ語のパラ言語情報の知覚の習得にも影響を与えている可能性も否定はできない。

「確信」および「留保付肯定」の発話意図を含む母語話者の発話に関して、知覚実験1回目・2回目のドイツ語学習者と、ドイツ語母語話者の知覚には有意差が見られた。ドイツ語学習者(実験1回目・2回目)よりも、ドイツ語母語話者の方が、正しく発話の意図を知覚していた。また、ドイツ語学習者とドイツ語非学習者の知覚には有意差が見られなかった。

「反論」の発話意図を含む母語話者の発話に関しては、知覚実験1回目・2回目のドイツ語学習者とドイツ語母語話者の知覚に有意差が見られなかった。一方、ドイツ語非学習者と、ドイツ語母語話者・学習者との間に有意差が見られた。このことから、ドイツ語の言語的情報の習得が、「反論」の知覚に影響を及ぼしているということが考えられる。

(2) ドイツ語学習者によるパラ言語情報を含む発話の生成

ピッチアクセントの位置について

以下の図2に、ドイツ語学習者の1回目(JD2019)、2回目(JD2021)、ドイツ語母語話者(DM)による、3つの状況(「確信」「留保付肯定」「反論」)に埋め込んだ2種類の短文の発話のピッチアクセントの位置に関して結果を示す：

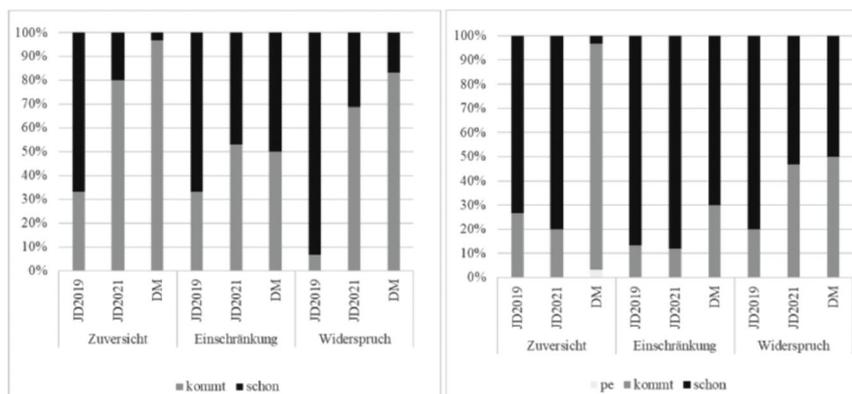


図2：JD2019、JD2021、DMによる2つの短文(左：Peter kommt schon. 右：Peter kommt schon zum Unterricht.)の発話におけるピッチアクセントを持つ音節の内訳(%) (Ikoma 2023b: 146)

図2の結果から、JD2019とJD2021による「反論」の発話に変化が見られることがわかった。JD2019では、学習者の多くが心態詞にピッチアクセントを置いているのに対し、JD2021では、心態詞にピッチアクセントがおかれる割合が減り、動詞部分にピッチアクセントがおかれる発話が多く、ドイツ語母語話者の発話に類似する特徴が確認された。但し「確信」「留保付肯定」の状況での発話に関しては、同じような特徴は見られなかった。

発話全体にかかる音声特徴（持続時間、基本周波数、インテンシティ）（図3参照）
 JD2019の発話に関しては、すべての音声特徴に関して、DMすなわちドイツ語母語話者の発話とは異なっていることがわかった。たとえば、「反論」の発話において、JD2019の発話では文全体の持続時間が他の状況と比較して短いのにに対し、DMの発話では他の状況と比較して文全体の持続時間は長い。また、基本周波数は、JD2019では「反論」の場合に高くなる、もしくは他の状況と比べて変わらないのに対し、DMでは、「反論」の発話の場合に低くなる傾向がみられている。JD2019、JD2021の発話には、持続時間、基本周波数、インテンシティに関して変化が見られた。文全体の持続時間については、JD2021の「反論」の発話において、ドイツ語母語話者と類似して長くなる傾向が見られた。文全体における基本周波数は、JD2021による「反論」を含む文 Peter kommt schon zum Unterricht.の発話において、JD2019と異なり、低くなっており、ドイツ語母語話者とも類似する特徴がみられた。インテンシティにおいては、JD2019では「反論」の発話におけるインテンシティが弱いのにに対し、JD2021の発話ではインテンシティが強くなる傾向が見られ、母語話者とも類似していた。

心態詞およびその周辺の単語の母音部分の第一・第二フォルマント（母音の音質）（図3参照）

JD2019、JD2021、DMのいずれにおいても、「反論」の発話における母音部分の第一フォルマントの値が他の状況と比較して高いことが明らかになった。第一フォルマントは、口の開きともかわりがあるとされており、開口度が上がるほど第一フォルマントの値も上がる。第一フォルマントに関するこの結果は、「反論」という

パラ言語情報が音声によって示される場合に、言語普遍的な特徴を示しているとも考えることが出来るであろう。一方、第二フォルマントに関しては、JD2021においてのみ、「反論」の場合に他の状況と比較して高くなっていった。JD2019、DMについてはピッチアクセントのおかれる音節が異なる場合に母音のフォルマントの値の比較はできないため、統計的な有意差が必ずしも出ていない可能性もあり、今後、音声データの数を増やして検証していく必要がある。

		JD2019	JD2021	Deutsch-Muttersprachler*innen
Dauer der ganzen Äußerung	(1) Peter kommt schon	Widerspruch kürzer als Einschränkung $F(2, 4) = 15.72, MSe = 7.391, p < .001$	Widerspruch am längsten $F(2, 4) = 25.72, MSe = 17.698, p < .001$	Widerspruch am längsten $F(2, 9) = 90.722, MSe = 42.28, p < .001$
	(2) Peter kommt schon zum Unterricht	kein Unterschied $F(2, 4) = 1.536, MSe = 1.399, n.s.$	kein Unterschied $F(2, 4) = 1.405, MSe = 0.716, n.s.$	Widerspruch am längsten $F(2, 9) = 26.90, MSe = 15.748, p < .001$
F0 Maximum der ganzen Äußerung	(1) Peter kommt schon	kein Unterschied $F(2, 4) = 0.765, MSe = 0.123, n.s.$	Widerspruch am höchsten $F(2, 4) = 10.81, MSe = 7.587, p < .001$	Widerspruch niedriger als Zuversicht $F(2, 9) = 12.378, MSe = 12.404, p < .001$
	(2) Peter kommt schon zum Unterricht	Widerspruch am höchsten $F(2, 4) = 8.484, MSe = 0.230, p < .001$	Widerspruch niedriger als Zuversicht $F(2, 4) = 9.287, MSe = 9.036, p < .001$	Widerspruch am niedrigsten $F(2, 9) = 41.27, MSe = 13.237, p < .001$
Intensität Maximum der ganzen Äußerung	(1) Peter kommt schon	Widerspruch niedriger als Zuversicht $F(2, 4) = 37.278, MSe = 2.3029, p < .001$	Widerspruch am höchsten $F(2, 4) = 30.668, MSe = 1.1764, p < .001$	Widerspruch am höchsten $F(2, 9) = 71.466, MSe = 32.90, p < .001$
	(2) Peter kommt schon zum Unterricht	Widerspruch niedriger als Zuversicht $F(2, 4) = 54.021, MSe = 2.0859, p < .001$	Widerspruch am höchsten $F(2, 4) = 36.364, MSe = 0.8607, p < .001$	Widerspruch am höchsten $F(2, 9) = 13.150, MSe = 11.074, p < .001$
Vokalqualität F1	(1) Peter kommt schon	o/ in schon : Widerspruch am höchsten $F(2, 4) = 5.951, MSe = 0.5776, p < .01$	o/ in schon : Widerspruch am höchsten $F(2, 3) = 5.68, MSe = 0.8006, p < .05$	o/ in kommt : Widerspruch am höchsten $F(2, 9) = 12.591, MSe = 0.160, p < .001$
	(2) Peter kommt schon zum Unterricht	kein Unterschied $F(2, 4) = 1.298, MSe = 0.2065, n.s.$	kein Unterschied $F(2, 4) = 3.027, MSe = 0.186, n.s.$	kein Unterschied $F(2, 8) = 3.069, MSe = 0.2510, n.s.$
Vokalqualität F2	(1) Peter kommt schon	kein Unterschied $F(2, 4) = 0.007, MSe = 0.0013, n.s.$	o/ in schon : Widerspruch am höchsten $F(2, 3) = 5.010, MSe = 1.2942, p < .05$	kein Unterschied $F(2, 9) = 0.397, MSe = 0.02490, n.s.$
	(2) Peter kommt schon zum Unterricht	kein Unterschied $F(2, 4) = 0.017, MSe = 0.0057, n.s.$	o/ in schon : Widerspruch am höchsten $F(2, 4) = 3.749, MSe = 0.9352, p < .05$	kein Unterschied $F(2, 8) = 2.372, MSe = 0.00985, n.s.$

図3：上述、に関する統計分析結果（Ikoma 2023b: 148）

ドイツ語母語話者による評価実験結果

JD2019、JD2021、DMによる発話について、上述の通りドイツ語母語話者による評価実験を行った結果、DMすなわちドイツ語母語話者による発話の多くは「5」（最も高い評価）の回答を得た。またJD2019とJD2021とでは有意差が見られ、JD2021ではJD2019と比較し、「5」の回答を得る発話が多かった。

(3) ドイツ語母語話者によるパラ言語情報の発話の音声特徴とピッチアクセントの位置

ドイツ語心態詞に関する先行研究（Meibauer 1994, Zimmermann 2018）によれば、「留保付肯定」および「反論」の状況下でドイツ語心態詞 schon にピッチアクセントがおかれる場合とおかれない場合とがあり、その意味・機能の違いや、どのような要因が絡んでいるのかは未解明のままである。本研究にて、コントロールグ

違いや、どのような要因が絡んでいるのかは未解明のままである。本研究にて、コントロールグ

ループとしてドイツ語母語話者による心態詞 *schon* の発話を分析した際、上記図 2 でも明らかのように、短文によってピッチアクセントの位置が異なっており、*schon* が発話末に置かれる場合には *schon* ではなく動詞にピッチアクセントがおかれる傾向が観察された。

以上のような当初の予想に反する結果が出たことを受け、学習者による発話と知覚に関する分析と並行して、ドイツ語母語話者による心態詞 *schon* の発話のピッチアクセントの有無に関して分析を進めた。

心態詞 *schon* が文末に置かれる場合と、心態詞 *schon* の後ろに 2 音節、3 音節、4 音節が含まれる短文の「留保付肯定」と「反論」の発話を分析したところ、心態詞が文末に置かれる発話においては、いずれの状況でも動詞部分にアクセントがおかれる割合が高いことがわかった (Ikoma 2023a)。一方、「反論」を含む発話のうち、*schon* の後ろに 2 音節が続く場合の発話 *Peter kommt schon zu uns.* の発話において、多くの場合に心態詞 *schon* にピッチアクセントが置かれていた。また、「反論」の発話においては、ピッチアクセントの位置に関係なく、ピッチアクセント部分の基本周波数の変動幅が大きく、ピッチアクセントのピークが比較的に後生じる (L+H*もしくは L*+H) パターンが多く表れていた。さらに、「反論」の発話においては発話末のピッチが多くの場合下降調 (L-%) となっていた。以上の点から、研究代表者は、「反論」や「留保付肯定」などの状況下でピッチアクセントがどの音節に置かれるかは、意味的な環境に加えて、音声的な環境 (*schon* の後ろの弱音節の有無や、発話末のピッチパターン) にも依存するのではないか、という仮説を立てた。森他 (2014:104) において「パラ言語メッセージの存在によって音韻情報が破壊されることがあるか」という疑問が呈されているが、上記の仮説が正しいとすれば、音韻情報を保存するために、パラ言語メッセージ (ここではドイツ語心態詞 *schon* を含む「反論」や「留保付肯定」といった発話意図) の存在があったとしても、音韻的環境によってドイツ語心態詞のピッチアクセント有無が変化する、とも考えられる。この点に関してさらに調査を進めるため、本研究期間の終わりにドイツ語母語話者による様々な動詞を含む短文の発話および知覚実験を行い、その分析作業を現在進めており、一連の研究結果をまとめて 2024 年中に口頭発表および論文執筆を行っていく予定である。

福岡昌子 (2017): パラ言語的情報の強調順位に関する日本語学習者の知覚. 音声研究 21 巻 (2017)3 号, 1-14. <https://doi.org/10.24467/onseikenkyu.21.3.1> (2024/06/09 確認)

Ikoma, Miki (2007): *Prosodische Eigenschaften der deutschen Modalpartikeln.* (Schriftenreihe PHONOLOGIA, Band 103). Hamburg: Dr. Kovač.

Ikoma, Miki (2023a): Prosodie der Partikel *schon*: Reanalyse anhand verschiedener *schon*-Äußerungen. In: Japanische Gesellschaft für Germanistik (eds.): *Linguisten-Seminar: Forum japanisch-germanistischer Sprachforschung.* 2023. Band 5, 40-57. <https://doi.org/10.11282/jggl.5.0.40> (2024/06/09 確認)

Ikoma, Miki (2023b): Wahrnehmung und Produktion von Äußerungen mit paralinguistischen Informationen bei japanischen Deutschlernenden. In: Japanische Gesellschaft für Germanistik (eds.): *Neue Beiträge zur Germanistik.* Band 167 (2023), 135-155. <https://doi.org/10.11282/jgg.167.0.135> (2024/06/09 確認)

Meibauer, Jörg (1994): Modaler Kontrast und konzeptuelle Verschiebung: Studien zur Syntax und Semantik deutscher Modalpartikeln (Linguistische Arbeiten 314). Tübingen: Niemeyer.

森大毅・前川喜久雄・粕谷英樹 (2014): 『音声は何を伝えているか 感情・パラ言語情報・個人性の音声科学.』 コロナ社

Scherer, Klaus R. (2000): Cross-cultural investigation of emotion inferences from voice and speech: Implications for speech technology. In: *Proceedings of the 6th International Conference on Spoken Language Processing (ICSLP) 2000, Beijing, China,* 379-382.

Zimmermann, Malte (2018): Wird *schon* stimmen! A Degree Operator Analysis of *schon*. *Journal of Semantics,* 35, 687-739. <https://www.ling.uni-potsdam.de/~zimmermann/papers/MZ2016-schonPaper.pdf> (2024/06/09 確認)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Ikoma, Miki	4. 巻 167
2. 論文標題 Wahrnehmung und Produktion von Aeusserungen mit paralinguistischen Informationen bei japanischen Deutschlernenden	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Neue Beitræge zur Germanistik	6. 最初と最後の頁 135-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11282/jgg.167.0_135	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Ikoma, Miki	4. 巻 5
2. 論文標題 Prosodie der Partikel schon: Reanalyse anhand verschiedener schon-Aeusserungen.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Linguisten-Seminar: Forum japanisch-germanistischer Sprachforschung	6. 最初と最後の頁 40-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11282/jggls.5.0_40	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Ikoma, Miki	4. 巻 なし
2. 論文標題 Prosodic and Phonetic Aspects of Paralinguistic Utterances with the German Modal Particle schon in L1 and L2	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of 10th International Conference on Speech Prosody 2020 (25-28 May 2020, Tokyo, Japan)	6. 最初と最後の頁 665-669
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Ikoma, Miki	4. 巻 なし
2. 論文標題 Phonetische Merkmale und deren paralinguistische Informationen im Deutschen und im Japanischen	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Tagungsband der Asiatischen Germanistentagung 2019, Iudicium	6. 最初と最後の頁 788-794
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 Miki Ikoma
2. 発表標題 Prosodie und paralinguistische Informationen bei japanischen Deutschlernenden: Produktion und Wahrnehmung von Äußerungen mit der deutschen Partikel schon
3. 学会等名 XVII. Internationale Tagung der Deutschlehrerinnen und Deutschlehrer (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ikoma, Miki
2. 発表標題 Prosodie der Partikel schon: Reanalyse anhand verschiedener schon-Äußerungen
3. 学会等名 日本独文学会語学ゼミナール・オンライン2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ikoma, Miki
2. 発表標題 Prosodic and Phonetic Aspects of Paralinguistic Utterances with the German Modal Particle schon in L1 and L2
3. 学会等名 10th International Conference on Speech Prosody 2020 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Miki Ikoma
2. 発表標題 Phonetische Merkmale und deren paralinguistische Informationen im Deutschen und im Japanischen
3. 学会等名 Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miki Ikoma
2. 発表標題 Phonetic Realization of Paralinguistic Information: Analysis of L1 and L2 German Speech with Modal Particle schon
3. 学会等名 New Sounds 2019: International Symposium on the Acquisition of Second Language Speech (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 生駒 美喜・小西 隆之
2. 発表標題 ドイツ語音声伝えるパラ言語情報：ドイツ語心態詞の 発話のドイツ語話者，学習者，非母語話者による知覚
3. 学会等名 日本独文学会秋季研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miki Ikoma
2. 発表標題 Prosodic and Phonetic Aspects of Paralinguistic Utterances with the German Modal Particle schon in L1 and L2
3. 学会等名 Speech Prosody 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ikoma, Miki and Hirschfeld, Ursula
2. 発表標題 Prosodie der betonbaren Partikel schon in Widerspruhsaeusserungen.
3. 学会等名 GAL-Tagung in Mainz (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 生駒 美喜
2. 発表標題 ドイツ語心態詞を含む発話における発話意図とアクセントおよび音声特徴とのかかわりについて
3. 学会等名 日本独文学会秋季研究発表会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ikoma, Miki
2. 発表標題 Prosody and paralinguistic information in L1 and L2 utterances containing the German particle schon and the Japanese sentence final particle -yo
3. 学会等名 Workshop "Paralinguistic information and phonological acquisition in Japanese and some European languages: Tolerance of foreign accent in multilingual societies" (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ヒルシュフェルト ウルズラ (Hirschfeld Ursula)	ハレ・ヴィッテンベルク大学・Abteilung Sprechwissenschaft und Phonetik・名誉教授	
研究協力者	ツォーベル ザラ・マゲダレナ (Zobel Sarah Magdalena)	ベルリン・フンボルト大学・Institut fuer deutsche Sprache und Linguistik・助教	
研究協力者	小西 隆之 (Konishi Takayuki)	神戸大学・大学教育推進機構 国際コミュニケーションセン ター・特命助教 (14501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	Martin Luther University (MLU)	Humboldt University Berlin		